

名寄市立大学

授業改善通信

第 2 号 (2019 年 4 月発行)

目 次

1 実施と変更点	1
2 授業評価アンケート実施・結果の報告	1
編集後記	3
アンケート結果を踏まえた分析・改善案 (別冊)	



1. 実施と変更点

平成 30 (2018) 年度後期の授業評価アンケートを実施した。9 月にワーキング・グループでの確認及び事務局職員との打合せを行ない、10 月の教授会にて実施内容を説明した。後期アンケートではいくつかの変更点があった。前期アンケートではアンケート登録を事務局職員に委ねていたが、事務局職員の負担を軽減するため後期アンケートでは授業担当教員による自己登録制とした。担当教員がアンケートのサイトにアクセスし、認証番号とアンケートコードを取得するという方法に変更した。学生への資料配布の準備の煩雑さを避けるため、登録締め切りを 11 月末とした。前期は初めての Web による実施ということもあり、対象科目を 1 科目に限定したが、今回は対象科目を複数科目にした。アンケートの結果は Web で公開する。また、前回に引き続き、今回も、アンケート結果を踏まえた分析や改善策を授業担当者を書いてもらった。それら分析・改善点は別冊にまとめ、学内限定で公開する。

2. 授業評価アンケート実施・結果の報告

(1) アンケートの実施状況

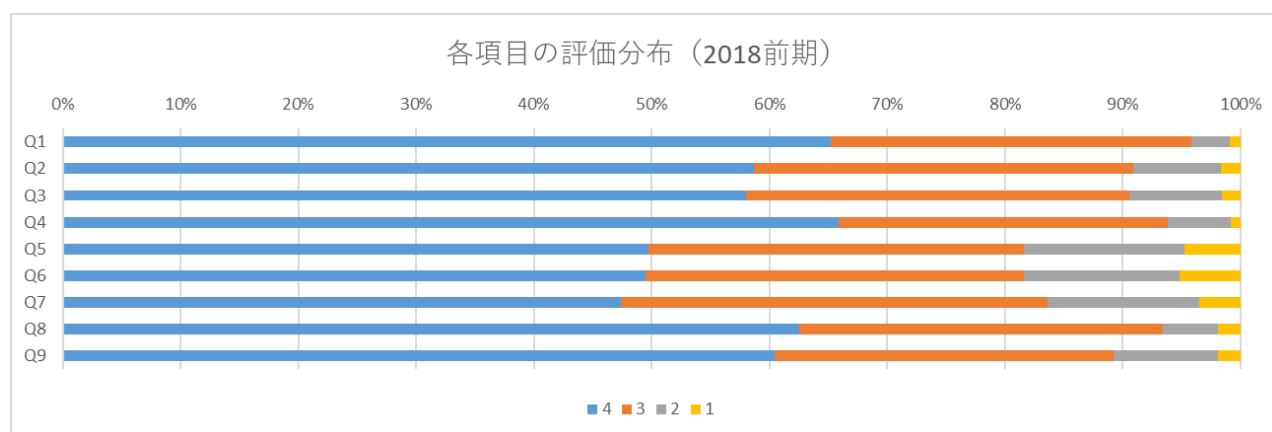
今回の授業評価アンケートが Web による 2 回目の実施ということで、対象科目を 2 科目以上の複数科目とした。実施状況を見ると、アンケートを実施した人数 (授業担当の助教を含む) は 33 名で、全体の 41% になった。実施人数は、前期の 44 名より 11 名減少した。実施科目数は 56 科目で、前期の 48 科目から微増という結果になった。後期アンケートを実施した教員のうち、コメント・改善案を記入してくれた数は 21 件であり、前期の 24 件を下回った。

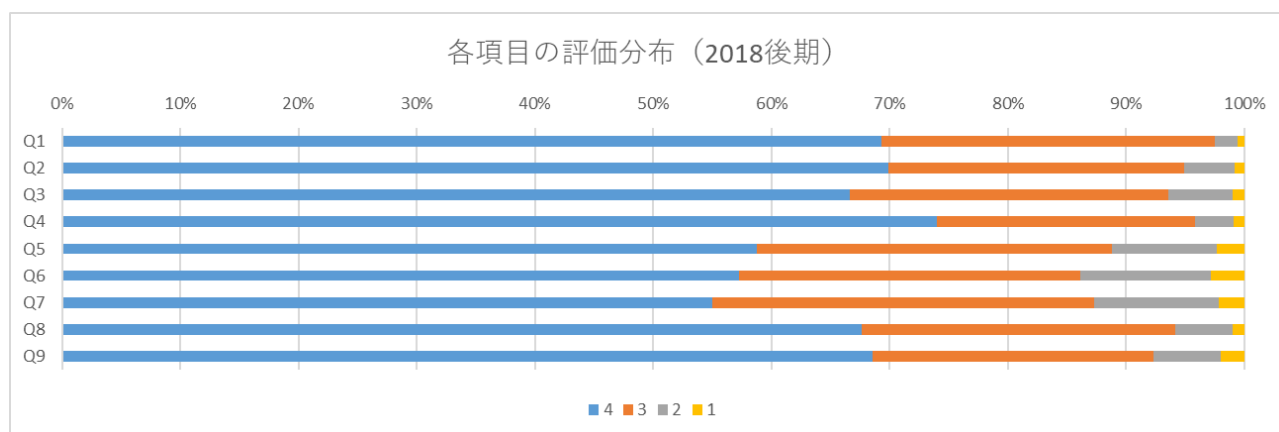
(2) アンケートの結果分析

次に、各アンケート項目の集計結果を見てみる。評価基準は、4. そう思う、3. ややそう思う、2. あまりそう思わない、1. そう思わない、の 4 段階になっている。

回答率 : 32.3% (のべ 2738 人中 887 名)

質問	4 件数 割合%	3 件数 割合%	2 件数 割合%	1 件数 割合%	平均 SD
1. シラバスに記載された内容に沿って授業が行われていた。	615 69.3	250 28.2	17 1.9	5 0.6	3.66 0.54
2. 授業の構成について、あらかじめ十分な説明があった。	620 69.9	222 25.0	38 4.3	7 0.8	3.64 0.60
3. 成績評価方法について、あらかじめ十分な説明があった。	591 66.6	239 26.9	48 5.4	9 1.0	3.59 0.64
4. 授業に対する準備は十分に行われていた。	656 74.0	194 21.9	29 3.3	8 0.9	3.69 0.58
5. 授業の進め方はわかりやすかった。	521 58.7	267 30.1	78 8.8	21 2.4	3.45 0.75
6. 教員の伝え方 (話し方、板書、スライド、実演) は明瞭だった。	508 57.3	256 28.9	98 11.0	25 2.8	3.41 0.79
7. 教員は授業環境の維持に努めていた。	488 55.0	286 32.2	94 10.6	19 2.1	3.40 0.76
8. 授業に対する教員の意欲や熱意を感じた。	600 67.6	235 26.5	43 4.8	9 1.0	3.61 0.63
9. 教員は学生に対して適切な対応を行っていた。	608 68.5	211 23.8	50 5.6	18 2.0	3.59 0.69





分析

表の各項目において評点の3ないし4が多く、全体的に見て、授業に対する学生の評価は高い。実施したのが授業改善に関心の高い教員であるがゆえにこのような結果になったとも考えられる。実施科目数や実施率、回答率など前期と後期とではデータの条件が違うが、前期と後期の評価のグラフを見るかぎり、評価の分布にはそれほど差がない。今後は、より多くの教員がアンケートに参加し、多くのデータを積み重ねることで、本学の教育の質がもっと見えてくると思われる。

前期アンケートの回答率が61.2%だったことに比べ、後期アンケートの回答率は32.3%と、約半分に減少した。Webによるアンケートは他大学の多くで実施されていて、回答率が問題になっているが、本学の後期授業評価アンケートでも同じような問題が生じている。

(3) 次年度の課題

2017年度までは授業評価アンケートは紙による実施だったが、2018年度よりWebによる実施となった。Webを利用することで用紙の作成や集計などの事務作業の負担が軽減されたが、新たな問題も生じている。アンケートの実施数の低下と回答率の低下である。まずは、実施数と回答率をどのように上げるかということが今後の最大の課題である。そのためには授業評価アンケートに対する意識・関心を高めるために、教員や学生にアンケートの意義を伝え、協力を継続的に呼びかけていくしかない。また、回答率を上げるためには、授業時間内にアンケートを実施する時間を確保するだけでなく、アンケートに回答するよう学生に積極的に呼びかける必要もあるだろう。

アンケートに対する分析・改善案もぜひお寄せいただきたい。「授業→アンケート→分析→授業改善→アンケート」という一連の流れを授業改善のPDCAと考えれば、分析・改善案を明示することは授業改善活動を可視化する重要な取り組みのひとつとなる。さらには、授業担当者のコメントは受講者が閲覧できる仕組みになっているので、受講者にはコメントを読むことを強調したい。授業担当者の努力はもちろん、アンケートに回答しコメントを確認するという受講者の行動なしには、大学としての授業改善は成り立たないと考える。

【編集後記】

『授業改善通信』第2号が発行になった。昨年度行った自己点検・評価報告書の教育における項目の一つとして、学生の学習成果をどのように把握し評価しているかという項目があった。学習成果の把握方法としてルーブリックがあり、「連携教育カルテ」を本学におけるルーブリックの実践例として前号に掲載した。ただ、学内には学習成果の把握方法がほかにもある。すでに実施されているものや、実施に向けて取り組んでいる動きもある。そうした取り組みについては情報を公開し、大学全体で共有したい。次号から、各学科等の取り組みを紹介する予定である。



発行日：平成31(2019)年4月
編集・発行：名寄市立大学・FD・IR委員会
授業改善ワーキング・グループ：石川貴彦(教養教育部) 小古間甚一(教養教育部、チーフ) 田邊宏基(栄養学科) 松浦智和(社会福祉学科)